

# 広島大学学術情報リポジトリ

## Hiroshima University Institutional Repository

Title	益田勝実の古典文学教育論成立過程の研究 : 「文学としての古典」を求めて
Author(s)	加藤, 梨音
Citation	論叢 国語教育学 , 16 : 24 - 33
Issue Date	2020-07-31
DOI	
Self DOI	<a href="https://doi.org/10.15027/50690">10.15027/50690</a>
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050690">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050690</a>
Right	
Relation	



# 益田勝実の古典文学教育論成立過程の研究

## —「文学としての古典」を求めて—

加藤 梨音

### 1 問題の所在と研究の目的

古典、そしてそれを学ぶことは常に人の歩みの傍らにある。時には社会を生き抜く教養として、時には統治者の権力を誇示する道具として古典は存在し続けてきた。現在では、『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』（2019）などで古典を学ぶ意義そのものが問われるとともに、現代とのつながりを意識させる作品との併用による学習が推奨されている<sup>1</sup>。このような動きがある一方で、今なお問題視されるのは、学習者の古典への消極的な姿勢（いわゆる「古典嫌い」）と古単語、古典文法を用いた内容把握に留まる「訓詁注釈的な授業」である。現代を生きる自分たちとは異なる語句、文法を使う古典作品に対し、学習者たちは足を止め、そこにどのような内容が述べられているのか、を明らかにすることに必死になってしまう。その要因の一つに、「結局は昔の話だろう」「今の自分たちとは無関係だろう」と古典のことばの裏に描かれた文化や、歴史、その時代を生きた人々と自分たちとのつながり、それを知り、感じ、考える楽しさへの実感の乏しさがある。益田勝実(1976a)は、このような古典と学習者との関係についていち早く言及し、「われわれと先出の作品とが〈古典的〉な関係—古典として取り組み、古典として超克しようとする努力する関係を結ぼうとする時、古典は出現する。」(p.16)と述べた。

彼の考える古典とは、先天的・永続的な価値をもつものでなく、読み手（現代人）が規定するものであった。渡辺春美(2018)はこれを『「関係概念」としての古典観』と名付け、その意義を評価し、この古典観が主体的な古典の授業、活発な古典の授業に通じてゆくことを指摘した。益田の古典観は、前述した今なお問われる古典を学ぶ意義、古典との隔たりを感じる学習者への対応といった現代の古典教育に関わる課題を解決する手がかりである。あくまで古典を読む「われわれ」が存在し、「〈古典的〉な関係」を結ぶことを古典（が存在するため）の前提条件とする彼の論考を今一度振り返るべきである。けれども、「指導内容としては益田勝実に代表される学習者の認識形成に深く関与させようとする指導観に基づいた授業を理想」としつつも、実践に結びつかない実態が指摘されてきた(内藤一志 2015)。益田勝実、その古典観を現在にいかすには、論考の内実を述べ直すことで、実践への糸口を見つけねばならない。

以上の問題意識から、本研究では、益田勝実を主な研究対象とした。その論考を3つの時代に区分した上で、対応する経歴、当時の社会背景を並列的に追った。それらを考察の手がかりとしながら、益田の古典観、古典教育観、求める学習者像の変容、成立過程を明らかにした。また、『説話文学と絵巻』（1960a）、『火山列島の思想』（1968）といった益田の著作も考察対象とし、文学研究者としての彼も追うことで、「文学としての古典」「古典を文学として読む」とは何か、を探っていく。本稿では、後者の文学研究者でもあった益田独自の文学観、古典文学教育観に焦点を当てる。

<sup>1</sup> 現行の学習指導要領（平成22年版）では、古典A、古典Bの教材として古文、漢文の他に「古典に関連する文章」、「古典についての評論文」の活用が奨励され、次期学習指導要領でも同様の傾向が確認できる。

## 2 益田勝実と古典文学教育

益田勝実は、定時制高校教諭、教科書編集委員など教育者、教育論者として活躍した人物である。さらに、日本文学協会の中心メンバーとして活動するとともに、『説話文学と絵巻』(1960a)や『火山列島の思想』(1968)などを執筆し、文学研究者としても評価を受けてきた人物である。教育、文学と2つの分野において発言を続けた益田の論考は、2006年、筑摩書房から『益田勝実の仕事』と名付けられた全5巻の論文集にまとめられた。三谷邦明(2007)は、日本文学協会の機関誌に投稿する際の必読書としてこの本を取り上げ<sup>2</sup>、鈴木日出男(2007)は、その論考の最大の魅力を「一貫して、人間とはいかに人間的な存在であるかを、根源的に問いかけつづけている点」であると評する。

益田は、古典を教えること、学ぶことを古典教育ではなく「古典文学教育」と呼ぶことにこだわっていた。彼によれば、「古典文学教育は、あくまでも、古典文学による文学の教育であり、それ以外であってはならない」(益田,1976a,p.220)。つまり、古典文学を学ぶ教育ではなく、古典文学を介した文学教育であることこそが古典教育であると考えていたのである。この姿勢の背景には、文学研究者の顔ももちえた益田の文学観がある。「文学として古典を読む」「古典によって文学教育を行う」ことを目指した益田は、そもそもどのような文学観をもっていたのか。益田が焦点を当てた柳田国男(とその民俗学)と説話文学の2要素との関わりを探ることで、益田にとっての文学を追った。

## 3 益田勝実の文学観を支えるもの

### 3-1 柳田国男への着眼

民俗学者として著名な柳田国男は、一見、益田勝実との関連を見出しがたい人物である。しかし、彼の作品について述べた論考は多数存在し<sup>3</sup>、作品集の「解説」として発表されたものもある。また、いくつかの先行研究でも接点が指摘されており、例えば、鈴木日出男(2006)は「日本文化の基底にある、民衆の生活に関わる広義の思想のありようを、益田氏は、民衆生活科学として日本民俗学を樹立した柳田国男の足取りを追尋しながら、自らの民俗学を模索してきた」と指摘する(p.588)。実際、益田(1964)は民俗の思想を究明することが「自己発見の問題」、「私たちとは何者なのか、を問うこと」であると評した。日本人、日本の民俗の思想を追うことは、生活の中に隠れた歴史を追うことであり、日本民族の将来を保証することにつながる。このように考えた益田は、柳田の民俗学から「時務」「世相の解説」「現代性」といった要素を見出している。

柳田国男は常に「自己と現代とをいかに結びつけるか」を模索し続けていた。戦時中、軽視されがちであった子どもに眼を向け、彼らに語りかけることを自身の最重要案件と捉えたのである。執筆に取り組んだ(『村と学童』(1945)をはじめとする)疎開児童読本<sup>4</sup>は、彼が終戦間近に「自分は何をすべきなのか」を問い、導き出した答えであろう。益田はこの柳田の姿勢が、(国、戦争を第一とする)時勢に背く単なる抵抗から生まれたのではない点に着目している。何かを「時務」と捉え

<sup>2</sup> 三谷(2007)は以下のように称賛する。「賛美の言葉は尽きないようだ。協会の機関誌『日本文学』に掲載される投稿論文は、この著作集を読破しているかどうかでまず審査すべきだと、提案しておこう。」(p.68)

<sup>3</sup> 益田勝実(1959a,1959b,1960b,1961,1964,1965a,1965b,1965c,1967,1973,1976b,1982)

<sup>4</sup> 柳田国男が疎開した児童に向けて執筆した書籍をさす。益田(1976b)は、『こども風土記』(1942)、『火の昔』(1943)、『村と学童』(1945)を「一連の子ども読み物の系」と紹介する。

るには、自分がこの時代・状況に対し、「どのような姿勢であるべきか、どう生き、どう暮らすべきか」が（理想・目標として）根底に必要である。そして、その実現のために目指す道筋、その一部こそが「時務」なのである。読本作成は、あくまで柳田国男その人が、何を今自分はすべきなのか、今とどう向き合うべきなのかを自身に問いかけた結果であった。したがって、疎開読本の執筆をはじめとする行動は、その時その時の柳田国男にとっての「時務」であったといえる。それら、またその背後に隠れた問題、その打開が急務として捉えられ、実行されてきたのである。（①自らの時務を模索する）

また柳田は、これまで政治の道具として歴史を用いてきたことを批判し、「常民の学」として捉え直すことを主張した。権力者、文献を重視した従来の歴史観からの脱却を目指したのである。現代社会の現象と比較類別、新旧判別することで、関連性から捉えそのつながりを歴史と捉える（相対的年代史）、民衆を基軸にその生活やことばに焦点を当てた歴史学がその理想であった。民衆の視点から歴史をつかみ直すことで、それらとの差異から現実の変化を認識するとともになぜそれが起きたのかを解明する手がかりにしようとしたのである。以上を踏まえると、柳田は常民、民衆、平民などのそれまでは虐げられた、あるいは軽視されてきた人々を出発点としたといえる。出来事をつなぐりを重視する（相対的年代史）を目指したのも、残された文献に踏まえられた権力者たちではなく、現象に現れる人々の姿を見ようとしたからであろう。このような立場に立つ柳田は、歴史教育観もそれに従っていた。著しく変化する社会を認識し、なぜそのような変化が起きたのかを考えさせようとする歴史教育を行おうとしたのである。益田(1961a)は疎開児童読本の1つ、『村と学童』を例に取って次のように彼の歴史教育観を捉えている。

民衆の具体的現実生活の変化の様相に眼を注ぎ、その世相に歴史的解釈を加えるというこの書の方法は、たえず眼の前のものに対して疑問を抱いて問いかけ、知識のあるもの、経験のあるものがそのものの歴史を教え、その知識によって、疑問の解決への準備を進める、という柳田学の骨法を典型的にあらわしている。(pp.402-403)

民衆がどのように生きてきたかという知識、経験をもつ者が、その歴史を自分の後に続く者に教え、疑問・課題への解決を促す。『村と学童』が子どもを対象とし柳田国男によって上梓されたものであることを加味すると、前者は柳田自身、後者は子どもたちをさす。自らの時務として眼前にある社会の様子に目を向け、後の世を見据えた柳田の、自らと同じく子どもたちにも生きてほしいとの願いがこの歴史教育観から窺える。（②世相の認識、その解明を行う）

①、②の根底には、単なる（今はなき）昔の慣習・風俗として歴史を捉えるのではなく、目の前の現実とどう関わっているのかを求める「現代性」が存在していた。自身の学で自分の現実を絡めて考え、またそれは同じ時代（現実）を生きる人々の興味・関心を引き寄せる要因となったのである。しかし一方で、その現代性は、②の政治に利用された歴史から脱却を目指す、新たな歴史観にもとづいて追求されたものであった。益田(1961a)は「政治的現実にあいわたらない〈現代の学〉だからである。政治的現実と対決し、未来とかがわりあうのでなければ〈現代の学〉は成立しえないだろう。」(p.407)と述べ、ここに柳田の学問の限界を見た。政治、その時の権力者に利用されてきた歴史は、柳田によって民衆の歴史として捉え直された。しかし、政治が歴史と関わってきたことそのものも歴史の一部である。そのため益田は、柳田が排除した「政治的事実」をも包括した〈現代の学〉の成立が必要ではないか、と考えたのである。（③現代性を求める）

益田が柳田の学問、あるいはその姿勢に見出した以上の点から、彼の問題意識、主張が明らかになる。戦前、戦後を経験した柳田は、目まぐるしく変化する社会の中を生きていた。自分が眼にする現実の中から「時務」を見極め、疎開児童読本の創作などに取り組んだ彼は、「歴史」「現代」「民衆」（常民）を次のような理想像として捉えていた<sup>5</sup>。

自分の生きる「現代」の変化、課題（「時務」）を「民衆」たち自身が見出し、新たな（民衆を主軸とする）「歴史」を手がかりにその経緯を明らかにするとともに解決を目指す。

このような姿は、益田(1965b)でも、柳田の「問いつづける学問、問いの連鎖としての学問」を考え、「問う者みずから問いを解け」をその独自の理論とした点が指摘されている(p.18)。その背景には、歴史を民族の将来のために活用し、次の世代の不安・不幸を取り除くものとして捉える姿勢があった。益田はこのように民俗学、歴史の価値、民衆の姿を位置づけた柳田国男に惹かれたのである。それを裏付けるかのように、益田は柳田作品の価値を見出し、その教材化、教科書教材としての採用を行っている。

益田勝実は、柳田の民俗学に「問い、歴史を手がかりにその問いを解く」人物を育てようとする未来を見た。その姿勢は、益田の国語教育観に影響を与え、かつ益田自身の民俗学を模索する一要因となった。また、柳田国男がその歴史観から排除した政治的側面をも包括し、益田は当時の人々の生活、生き様を明らかにしようとしていた。新たに民衆へと目を向け、その歴史を用いて自身を知り、次世代、未来へといかそうとする姿勢は、民俗と人間との関係を構築し、人間の未来への糧としようとする試みといえる。加えて、柳田に関する論考は1960年代に散見している。その時期の益田は高校生、1966年からは大学生を相手に国語教育、古典教育の研究を進めていた。彼の古典文学教育観は、益田(1976a)にてある程度確立される。益田の古典観、古典教育観はそれ以前の要素を組み込んでいるはずであり、この点からも柳田と益田の論考との関連性の高さを窺うことができる。

### 3-2 説話文学への着眼

益田勝実は古代文学を専門としており、中でも説話文学に対する思い入れが深かった。その証拠に、主な著作である『説話文学と絵巻』(1960a)、『火山列島の思想』(1968)はどちらも説話、説話文学に焦点を当てて述べられている。その中で益田は、前項で見た柳田の民衆に目を向けた歴史観、民俗学観と同様に、口承の文学として伝わり、文字の文学として成立してきた文学、民衆が作り上げてきた文学の価値を認め、その他との差異や特徴、意義を主張している。『説話文学と絵巻』は「説話文学の文学としてのいのちを探り当て、それをすこしずつ掘り出してみせてくれるような研究書がはじめて現われた」（西尾光一,1960,p.70）と大いに評価されてきた。また小峯和明(1985)は、益田も所属した歴史社会学派によって「国民文学」の視点<sup>6</sup>から「説話集の文学性」が見出され、以後の

<sup>5</sup> このような柳田の姿勢は益田(1964,1976b)にて指摘されている。益田(1964)では、柳田の学問を「記載科学でありつつ、現実改革をめざす現代科学である」とし、益田(1976b)では、「湧き返る戦時中の情勢と間合いをとり、疎開児童の慰め手となり、ひたすらに父老の後の者への世相解説の任務に徹しようとしていた」(p.326)とする。

<sup>6</sup> 日本では、戦後民族独立の危機を反映し、「国民のための文学とは何か」「文学とはどうあるべきか」が問われた。（説話については後述するが）説話の中で様々な人々が描かれ、「伝承」という形で受け継がれてきた点に着目し、その価値が「文学性」という語を用いて見出されたのであろう。

研究に多大な影響を与えたことを指摘した上で、その典型として『説話文学と絵巻』を挙げる(p.93)。益田はこの著書の中で、口伝えで伝わってきた「口承の文学」の重要性を主張するとともに、文字に書き起こされた「文字の文学」を中心に歴史を研究する「文献偏重」を批判した。その上で2つの文学を説話と説話文学に置き換え、その特徴を述べている。以下の表は、稿者がその主張をまとめたものである。

観点	説話（「口承の文学」）	説話文学（「文字の文学」）
特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>・口伝えで繰り返し伝承</li> <li>・「集団創造としての文学」</li> <li>・伝承者間での共通知識、関心・問題意識にもとづく</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文字で記す</li> <li>・「口承と文字の文芸の出会いの文学」</li> <li>・説話を基盤としてふまえる →「伝承としての事実」から脱出不可</li> <li>・広汎な読者を想定</li> </ul>
人間像	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一面的に端的に 浮かび上がらせようと心がける</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・性格のいくつかの面を 組み合わせて描く</li> </ul>
状況設定等の諸要素	<ul style="list-style-type: none"> <li>・独特な簡潔な行動本位の描写</li> <li>・話の筋の洗練された展開</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・形象の写実性</li> <li>・人間性・人間の問題を 複雑な構造で描く</li> </ul>
心情や行動	<ul style="list-style-type: none"> <li>・直接性格を説明しない</li> <li>・心情を語らない →行動描写を積み重ねることで示す</li> </ul>	

（『説話文学と絵巻』をもとに稿者が作成）

説話、説話文学はどちらも直接性格や心情を述べず、行動描写を積み重ねることで示すという特徴をもつ。それに加え、説話文学は、「口伝え」で伝承されてきた説話を基盤としてふまえながら、「文字」を用いて創作されたものである。また、説話が主人公の人間像を「一面的に端的に」描く一方、説話文学は「いくつかの面を組み合わせで」描く。したがって、前者を簡潔で洗練された展開、後者を複雑に描かれた人間性、写実の点で評価している。また益田は、説話文学と同じく広汎な読者を対象とする「虚構の文学」を取り上げ、伝承説話のふまえ方、その相違を指摘する。彼によれば「虚構の文学」とは、伝承説話における事実から離れて虚構を展開する別種の文学、作者が直接向き合った自己の内面や社会の現実を反映して描く文学である。（『源氏物語』をはじめとする

物語文学が当てはまると考えられる。)これに対し、伝承説話をある時点での現実と捉え、それと自己(作者・編者)が生きる現実とを対置させながら描くのが「説話文学」である。「虚構の文学」が作者の眼前の出来事、あるいはその想像力によって創作される一方、「説話文学」は伝承者たちによって選び取られた説話を基盤とし、編者によって更に複雑な構造をもつものとして創作された。前者は筆者の生きる現実、後者は説話に描かれた現実に重きを置いているといえる。

以上を踏まえると、益田は説話文学に次のような特徴(あるいは価値)を見出している。説話文学は、基盤としてふまえる「説話」よりも複雑な人間像や構造をもっていた。文献偏重に否定的な益田にとって、文字ではなく口承によって現在まで伝えられてきた話こそが重視すべき、と考えていたはずである。しかし、創作過程(説話をふまえているか)を判断基準として虚構の文学、説話文学を区分していることを考慮するに、説話を掘り起こす文学として説話文学の価値を認めていたのではないか。その時代の人間に寄り添った描写を行う説話を基礎としつつ、説話では描けなかった人間の複雑性などを取り入れたことで、人の歴史性、本質を捉える作品と捉えたのだろう。また、説話文学は伝承者、編者と二層の異なる視点から選び取られ、描かれた人間、人間性は説話として語られた時代、編者の生きた時代、そして読み手の時代へと引き継がれてきた。説話が(共通の知識や問題意識をもつ)伝承者間という限られた範囲で伝わってきたのに比べ、説話文学は複数の時代を経ながら今なお存在するという複合性も持ち合わせている。人々の生活に寄り添いながら伝わってきた説話をふまえ、かつ説話ではなしえない複雑な展開、人物像を描く説話文学に益田は、読む価値、秘められた良さを見出したのだろう。

さらに、『火山列島の思想』では説話文学に限らず、それぞれの時代の人の姿を追いながら日本人の歴史を探り出す益田の姿勢が窺える。「王と子—古代専制の重み」の章において、益田は倭建命の物語を取り上げる。『古事記』『日本書紀』にて語られる倭建命の世界は、死に際の敵からの祝福のことばによって雄々しくなる世界<sup>7</sup>、神に仕える叔母から受け取った衣服が役に立つ世界<sup>8</sup>である。このような呪術的な世界が描かれる中、倭建命は時に女装して近づき<sup>9</sup>、時に偽の刀を渡して決闘をし<sup>10</sup>、敵を討ち取った。正面から敵を倒すのではなく、計略をめぐらす倭建命の姿は一見、勇者らしさを感じることはできない。益田はこのように自分たち(現代の読み手)は感じると想像する一方、知恵が第一に重んじられる、「知略を尊敬していた時代」の存在をこの物語から読み取っている。

人間の知恵というものの力に対する強烈なあこがれが燃えている世界と、呪術的なものがはびこっている世界とを同時につかむことは、現代人にとっては容易なわざではない。が、われわれの祖先は、ずっと原始の時代から、困難な条件と常に戦わねばならない生活の中で、絶えず、知恵こそ人間の最大の力であることを教えられてきていたのであった。呪術もまたその知恵の、ある段階での現われである。(p.132)

現代の我々は、知恵と呪術を「併存」するものとは捉えがたい。それどころか、前者を現実的な

<sup>7</sup> 父である景行天皇に命じられ、倭建命(この時点ではオウスノミコト)は熊襲征伐に出る。女装して近づいた彼にみごと討ち取られ、命を落とすクマソタケルは「ヤマトタケル」の名を贈った。

<sup>8</sup> 叔母のヤマトヒメノミコトは、西征の際に自らの衣装を授け、倭建命はそれを女装用の衣装として使用した。

<sup>9</sup> 熊襲征伐において、クマソタケル兄弟の宴に女装して忍び込み、彼らを討ち取った。

<sup>10</sup> 熊襲征伐の後、出雲の国に赴き、イズモタケルと友人関係となった倭建命は、偽の刀を持っていき、彼に刀の交換を申し出る。その後、決闘を申し込み、イズモタケルを討ち取った。

もの、後者を空想的なものと捉え、両極に位置するとすら考えるだろう。しかし、倭建命の物語では、知恵、呪術の両者が主人公倭建命を助け、物語を進行する要素として描かれる。『古事記』『日本書紀』を記録した我々の祖先は「知恵を人間の最大の力である」と考え、「呪術もまたその知恵のある段階での現われ」であると考えていたのである。益田は他にも、(前の内容、事物がその後の内容に役立つという) 伝承の約束にも従いつつも、敵への接近の難しさを(日を経て討伐の日を設定することで) 写實的に描く点に触れる。これまでの文学と同様の傾向をもつ一方で、その後の文学に現れる特徴を踏まえるこの作品を「日本の文学の歴史ある発展段階」と捉えることを主張する。益田はこの物語から、現代とは異なる認識(知恵と呪術との共存)がある一方、伝承の決まりに従いながら、写実性を押し出してゆく当時の文学、その作者の姿を捉えたのである。

「日知り裔の物語—『源氏物語』の発端の構造」の章では、『源氏物語』、特に「桐壺」の巻における父母の記述を取り上げる。光の出生を物語るために父帝と母更衣との悲恋が語られたのではなく、母を死に追いやる契機、「親たちの貫きおおせなかった愛情の歴史を継ぐもの」(益田 1968,p.188)として光の生涯が描かれ始める、とした<sup>11</sup>。(作者紫式部によって) 父母の物語が、単に主人公の系図を明らかにするため<sup>12</sup>以上の役割もち、「光源氏の、人を愛し、愛するがゆえに悩む業を負った生涯」に先立つ先行者たちの物語として存在する、と考えたのである。そして、それは「親の業を受けて、子が生きる」(益田,1968,p.190)と子の性格、生涯が先立つ親に左右されると考えた、作者紫式部独自の現実認識にもとづくとし、以下のように述べた。(下線部：稿者)

桐壺の帝と桐壺の更衣の物語を、光の系図を語る前置き以上のものとして、深く描くことによって、紫式部は、光の血の系図と同時に、生き方の系図を語ろうとしたのであろう。もちろん、親の因果が子にたたる、という非仏教的な〈因果〉の俗世間的認識は、古代貴族社会にもあっただろうが、それを、生きていく悩みを人間が世から世へと受けついでいる、という考えに深め、物語文学展開の支柱にすえたのは、式部の個性的な現実認識であろう。そして、それが、前期物語文学の伝統であった〈できごとを語る物語〉を、〈できごとのこころを語る物語〉に飛躍させたのであった。(p.192,振り仮名,傍点ママ)

仏教では、各人が宿縁を負って生き、来世ではこの世の果報を生きる(とされる)ため、「親の因果が子にたたる」ことはない。しかし、作者紫式部は〈因果〉、そしてそれを世代が変わっても逃れること、消えることのない苦悩として描き出した。親子の血縁による系図、親の因果による生き方の系図、更には生きることに對する悩みの系図を支柱に成立したのが『源氏物語』なのである。また、益田は、光を生んだ後体調を崩した更衣と帝とのやり取りにも着目する。天皇以外の死を許さない当時の宮廷において、帝は更衣を看取ろうと試みる。けれども結局は、帝は更衣の退出を許可し、それが永遠の別れとなってしまう。益田は、このように当時の掟を破ろうと苦悩する人間を描

<sup>11</sup> 益田はこの根拠として、「さきの世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の御男子さへ生まれ給ひぬ」の「さえ」という助詞に着目する。「さえ」を用いることで、光の誕生が「親たちの悲しい思い合いの歴史の一つの深まりの契機としてつかまれている」とした(益田,1968,p.188)。

<sup>12</sup> 益田は「古代物語の伝統的な方法の中では、主人公の父母を語ることは、主人公の系図を明らかにすることであり、系図を明らかにする以上に、父母が役割を負うことはなかったようである。」(益田,1968,p.188)と述べ、伝統から脱却した父母の語りを行う作者の姿を指摘している。

いた紫式部を「理想を物語る作家」ではなく、「現実の矛盾に悶えぬく人間から眼を離さない作家」と評している(益田,1968,p.209)。(聖別された)天皇でさえ、宮廷の掟と愛しい人を看取りたいという願望、愛との狭間で悩み、乗り越えることはできなかった。その苦悩する姿は光へ、その次の世代へと受け継がれてゆく。それは、出来事だけでなく、それに関わる心をも描く物語〈できごとのこころを語る物語〉の成立にもつながっていった。益田は、このような人間の像を描いた作者が「それ以前に、そのような心<sup>13</sup>の持ち主に共鳴しうる自己と、自己に先立つ同じような人間との心と心との触れあいを、体験しているのだからなければならない」(益田,1968,p.211)と、作者紫式部の姿を捉えている。

#### 4 益田にとっての文学

柳田国男、説話文学に着眼した益田は、前者から「時務」「世相の解説」「現代性」といった要素を探り出した。自らが「時務」と考えたことに取り組む姿、あくまで「民衆」を起点、対象としながら「世相の解説」に取り組む姿、自分の学問がどう役に立つのかという「現代性」を追い求める姿。これらの姿勢はどれも、「問い、歴史を手がかりにその問いを解く」人物の育成を目標とする柳田の根幹をなすものであり、益田の古典観、古典教育観への影響が垣間見えた。また、『説話文学と絵巻』、『火山列島の思想』を手がかりとし、益田にとって文学とは何か、文学から何を見出そうとしたのかを探った。どちらの著書においても、益田は登場人物とともに編者、作者といった文学の外部に存在する人間を考察対象としていた。文学に描かれる人間、その生活、生き方などはその時代の「歴史」を知る手がかり、その構成、描写は作者(編者)の認識、その文学の「歴史」を知る手がかりとなる。倭建命の物語では、知恵と呪術とが共存し、展開する世界の存在を見ると共に、この物語が前の出来事、事物が後に役割をもつという伝承性、主人公の苦境を情景描写によって描き出す写実性が現れる「日本の文学の歴史ある発展段階」(の文学)であるとした。他方、『源氏物語』では、作者紫式部の「親の因果が子にたたる」という現実認識、「現実の矛盾に悶えぬく人間から眼を離さない」姿勢を指摘した。掟と愛との板挟みに苦しむ父帝を描き出し、両親から光へとその生き方、苦悩が受けつがれる〈できごとのこころを語る物語〉の成立を見ていた。(なぜ考察対象に選んだのかは明記されていなかったが)その文学の内容のみならず、歴史的価値についても述べようと試みていたのではないか。

民俗学を自分の研究対象とし、その歴史、それをいかにして現代に活用するかを模索した柳田の姿は、文学からその歴史を紐解こうとした益田の姿と重なる部分がある。『火山列島の思想』(益田1968)のあとがきにおいて、益田は「わたしは、日本の歴史の中に、自分に通じるものと、自分とはまるで違うものを探り出してみたかった。」(p.284)と述べる。彼は、文学を入口として「日本の歴史」を振り返ろうと試み続けた。その中で見えてきた、当時の人間の思考や、生活や文化は、現在を生きる益田にとって、「自分に通じるもの」、歴史的な繋がりを感じるものもあれば、「自分とはまるで違うもの」、(繋がりが仮にあったとしても)自分とそれとの間に断絶を感じるものもあった。どちらが大切、どちらがより重要、などといった優劣はなかったであろう。繋がりも、断絶をも包括し、文学に描かれた精神・生活を探ることで日本の歴史を追うことこそが、益田が文学を読む最終的な目標ではなかったか。

---

<sup>13</sup> 「真実な愛にひたされて生きたいと悶える心」(益田,1968,p.211)

## 5 おわりに―研究の成果と展望―

本研究の目的は、一定の評価を受けながら、未だ抽象度が高く、実践に結びつきづらい益田勝実の古典文学教育論の内実を明らかにすることにあつた。教育、文学の2点から迫った研究のうち、本稿では後者に焦点を当てた。そして「古典文学教育」という呼び名にこだわり、「文学として古典を読む」ことを目指した益田の意を汲み取るべく、彼の文学観を明らかにしようと試みた。柳田国男の項では、益田が彼の作品、論考について述べた論文を分析し、①自らの時務を模索する②世相の認識、その解明を行う③現実性を求める、という3点を見出していたことが明らかになった。このような姿勢は、その後の益田の古典観、古典教育観形成における一要素となつていった。また、柳田の民俗、民衆へ目を向ける姿勢に賛同しつつも、彼がその歴史観から排除した政治的側面を含めた民俗、民衆の歴史を探ることが必要であると考えていた。他方、説話文学の項では、益田の代表的な著作である『説話文学と絵巻』『火山列島の思想』を手がかりに、益田自身がどのような話の、どのような点に着目したのかの考察を行った。説話、説話文学、虚構の文学の三者を区別したり、倭建命の物語から知恵と呪術に対する当時と現代との差異、日本の文学の歴史を読み取ったりする様子を窺うことができた。今回取り上げた柳田国男、説話文学の論考は内容上、古典を学ぶこと、古典教育を前提としたものではない。しかし、益田自身がどのような姿を理想像としていたのか、文学を通して何を見ようとしたのか、が綴られた重要な論考である。

「古典を文学として読む」。文学を読む先に、彼の目指す古典を読む姿がある。「問い、歴史を手がかりにその問いを解く」人物を理想とした柳田に傾倒したのも、説話文学をはじめとし、文学の内容に留まらず、作者、編者の存在に目を向けて人の生涯、認識、生活、その歴史的立場づけを追ったのも決して無関係ではない。これ以降、益田(1976a)を中心とする古典文学教育論において、益田は現代を生きる自分を起点として古典を読む、その存在・価値を問う姿勢の形成をその目標とする。柳田国男、説話文学における論考は、その成立経緯にかかわる一要素として彼の内部に秘められていくといえよう。

本稿では、益田の教育的側面を取り上げることができなかつた。1950年代、1960年代、1970年代と、益田(1976a)に至るまでの彼の論考を分析すると、それぞれ次のような変遷が窺える。教師、教科書編集委員として自らと教育とのつながりを意識し始めた「国語教育、古典教育観への素地形成期」、古典教育の現状批判を行うとともに、育成を目指す学習者像、教育像を模索する「古典教育、文学教育の目標と課題解決模索期」、管理社会下において主体を追い求める学習者像を確立する「関係概念にもとづく古典文学教育論の成立期」。彼がいかにして『『関係概念』としての古典観』を成立させてきたのか、その成立過程は明らかにしてきた。けれども、彼の論考を現代の古典教育にかすには、未だ課題も残る。本研究において、教科書編集委員として携わった教科書の指導書や独自に教材として取り上げた作品の論考についての分析までは至らなかつた。実際の授業に活用するには、理論的な理解に留まらず、結局実践の際には何を重視し、どう行うべきなのかを探る必要がある。また、現代人に重きをおく益田の古典観には、「現代人の認識、目利き」に合致しないものは排除されていく可能性を含んでいる。そのため、益田自身はどのような作品を古典、古典教材として相応しいと考えていたのか、によって判断基準を探るとともに、それは適当なものなのか、益田の後を生きる「現代人」である私たちが、引き続き問いかけ続けなければならない。

## 6 主要引用参考文献

- 勝又基(編)(2019)『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた。』文学通信
- 小峯和明(1985)「説話文学研究の三十年」『中世文学』30、中世文学会
- 鈴木日出男(2006)「解題」鈴木日出男・天野紀代子編(2006)『益田勝実の仕事1－説話文学と絵巻－』筑摩書房
- 鈴木日出男(2007)「益田勝実氏の学問」『月刊ちくま』430、筑摩書房、但し引用は、筑摩書房  
HP([http://www.chikumashobo.co.jp/pr\\_chikuma/0701/070101.jsp](http://www.chikumashobo.co.jp/pr_chikuma/0701/070101.jsp))より(確認日時:2020.6.14.12:45)
- 内藤一志(1993)「益田勝実の古典教育論についての検討」『語学文学』31、北海道教育大学語学文学会
- 内藤一志(2015)「古典」『国語科重要用語事典』明治図書、p.137
- 西尾光一(1960)「<書評>益田勝美著『説話文学と絵巻』」『日本文学』9(6)、日本文学協会
- 益田勝実(1959a)「『炭焼日記』存疑(一)」『民話』14、民話の会、但し引用は、鈴木日出男・天野紀代子編(2006)『益田勝実の仕事1－説話文学と絵巻－』筑摩書房
- 益田勝実(1959b)「『炭焼日記』存疑(二)」『民話』15、民話の会、但し引用は、鈴木日出男・天野紀代子編(2006)『益田勝実の仕事1－説話文学と絵巻－』筑摩書房
- 益田勝実(1960a)『説話文学と絵巻』三一書房
- 益田勝実(1960b)「『炭焼日記』存疑(三)」『民話』17、民話の会、但し引用は、鈴木日出男・天野紀代子編(2006)『益田勝実の仕事1－説話文学と絵巻－』筑摩書房
- 益田勝実(1961)「炭焼き翁と学童」『文学』29(1)、日本文学会、但し引用は、鈴木日出男・天野紀代子編(2006)『益田勝実の仕事1－説話文学と絵巻－』筑摩書房
- 益田勝実(1964)「民族の思想」『現代日本思想大系30 民俗の思想』筑摩書房、但し引用は、鈴木日出男・天野紀代子編(2006)『益田勝実の仕事1－説話文学と絵巻－』筑摩書房
- 益田勝実(1965a)「『清光館哀史』鑑賞の要点・教材の問題点」『現代国語3 学習指導の研究』筑摩書房、但し引用は、幸田国広編(2006)『益田勝実の仕事5－国語教育論集成－』筑摩書房
- 益田勝実(1965b)「柳田国男の思想」『現代日本思想大系29 柳田国男』筑摩書房
- 益田勝実(1965c)「あとがき一編集にあたって」『現代日本思想大系29 柳田国男』筑摩書房
- 益田勝実(1968)『火山列島の思想』筑摩書房、但し引用は、益田勝実(2015)『火山列島の思想』講談社(同書再版作)
- 益田勝実(1973)「柳田・折口における原初的なものへの照射」『国文学解釈と教材の研究』18(1)、学燈社
- 益田勝実(1976a)「教材をどう考えるか(1)古典文学教育の場合」『解釈』22(5)、教育出版センター
- 益田勝実(1976b)「解説」、柳田国男『こども風土記・母の手毬歌』岩波書店
- 益田勝実(1982)「折口をふまえて柳田をどう見るか」『国文学解釈と教材の研究』27(1)、学燈社
- 三谷邦明(2007)「陸封魚の歓喜と悲哀—『益田勝実の仕事』全五巻の完成を祝して—」『日本文学』56(1)、日本文学協会
- 渡辺春美(2018)『「関係概念」に基づく古典教育の研究—古典教育活性化のための基礎論として—』溪水社

(愛知県立豊田西高等学校)